ニュースから学ぶ

11日に表彰式

福島民友新聞社が創刊115周年を記念して創設した「第1回みんゆう新聞感想文コンクール」。小学3・4年生、同5・6年生、中学生の3部門に県内113の小、中学校から1797点の作品が寄せられ、審査の結果、各部門で最優秀賞1点、優秀賞3点、入選5点の入賞作品と学校賞2校が決まった。表彰式は12月11日、福島市の福島民友新聞社で行われる。最優秀賞、優秀賞の受賞作品を紹介する。

コンクールは、2011年度から小学校、12年度から中学校で完全実施される新学習指導要領に「新聞活用」が明記されたのを機に、児童・生徒の広い視野と豊かな心をはぐくむ生きた教材として新聞を活用、確かな表現力を身に付けてもらう目的で初めて実施した。

「新聞記事を読んでの感想」をテーマに、今年6月から8月末までに福島民友新聞をはじめ一般紙に掲載された記事や社説、コラム、連載企画などを読んで感動したこと、ためになったこと、興味を持ったこと―などの感想文を募集した。身近なニュース、自然や環境、少子高齢化の問題などを取り上げ記事を通して感じたことを、素直な感受性や豊かな想像力で表現した作品がそろった。

審査委員長を務めた福島地区中学校教育研究会国語部長の佐藤和彦平野中校長ら審査委員が厳正に審査し、入賞作品を選んだ。

◆最優秀賞（中学生の部）

「秋葉原殺傷事件について」

喜多方一中3年　那知上（なちがみ）　嘉海（よしみ）さん

「最後に帰る場所は掲示板」

この記事を読んだとき、今までのただ凶悪で悲惨な事件という印象が変わり、今の日本の現状を象徴している出来事だったのかもしれないと思いました。

私は学級委員長をしています。三年生になり、立候補しました。三年生というのは、一年のときとも二年のときとも違う、より大切な学年です。その大切な一年間を有意義なものにするためには、みんなが学校に行きたいと思えること、必要なのは学校での居場所だと考えました。そして、クラスメイトにとって、卒業までのかけがえのない居場所になり、卒業してからも心の拠り所となるようなクラスにしたいと思いました。問題があれば本気で話し合い、お互いに足りない部分を補い合いながら、毎日楽しく過ごしています。三年二組は、私の居場所です。

私が家に帰ると、家族が迎えてくれます。夕食は一家団らんの時間です。家族で今日の出来事を話し合う、とても重要であたたかいひとときです。家族と話していると、ここは私の帰る場所は家族なのだと実感することができます。

私は、学校に行っても家に帰っても自分の居場所があります。

人間は一人では生きていけません。誰かからの愛がなければ生きていくことはできません。人間には、それぞれの居場所が必要なのです。加藤被告の幼少時代のことを読んでみると、幼い加藤被告が感じた、親からの愛が少なかったように思いました。加藤被告は、ずっと寂しかったのかなと思いました。居場所を探し続け、やっとたどり着いたのが掲示板だったのではないでしょうか。

加藤被告は、掲示板に依存し過ぎていたことも、自己主張の手段も、間違っていました。しかしそれは、加藤被告一人の問題なのでしょうか。人とのコミュニケーションの取り方や、自分の気持ちの伝え方は、成長していく中で学ぶことですから、加藤被告は、学ぶ環境に恵まれていなかったのではないかと私は思いました。

今の日本には加藤被告のように、孤独を感じながら生きている人が多いと思います。日本は豊かな国ですが、日本人はどんどん心が貧しくなっているようで悲しいです。

メールやチャット、掲示板などで人と繋がることは簡単にできますが、本当の人と人との繋がりは、目に見えないあたたかいものなのです。パソコンや携帯電話は、あくまで、ただの道具に過ぎません。

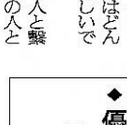
日本人が忘れかけている、人と人との絆。それを見つめなおしていかない限り、この事件が解決されたとは言えないのではないでしょうか。

部門ごとに最優秀賞など各賞を選んだ審査会＝福島民友新聞社

◆優秀賞（中学生の部）

「臓器提供について考える」

若松四中3年　加羽沢（かはさわ）　梨紗子（りさこ）さん



脳死判定されれば、本人の意思、書面、ドナーカードがなくても家族の承諾で臓器提供が可能になった。この記事を読んで私はとても複雑な気持ちになった。

まず、本当に脳死は人間の死なのだろうかという疑問を持った。もし、私の家族が交通事故にあい、脳死判定されたとする。その時私は、脳が機能しなくなったことを、死んだと受け入れられるのだろうか。その時私は、家族の臓器を臓器移植をしなければ生きられない患者さんに提供したいと思うだろうか。心臓も、他の臓器もきちんと機能し、鼓動も聞こえ、温かい手を握ることができる愛する家族に対して。

反対に今度は、もし、家族や友人が臓器移植をしなければ死んでしまう病気だったら、私はどんな行動をとるだろうか。昨年、いわき市の中学生の鈴木まさひと君が心臓移植をしなければ生きられない事を知った。日本での移植手術を待つ命の問題はなく、カナダでの心臓移植が決まり、私の通う中学校でも募金活動が行われた。私は迷わず募金に協力し、手術の成功を祈った。まさひと君の移植手術が成功した事をニュースで知り心から良かったと思った。鈴木まさひと君の立場がもし、自分の家族だったらどうだろう。私は何とかして臓器移植手術を受けさせてあげたい。そして、臓器提供者が一日でも一秒でも早く現れてほしいと願うに違いない。そう考えると、臓器提供とは何て勇気のいる行動なのだろうと思った。

私は、いろいろと考えているうちに、三年前に末期の肺ガンで亡くなった祖父の死を思い出した。火葬後に残ったものは骨だけだった。臓器も脳も全て灰と化した。一緒に過ごした日々は脳裏に鮮やかによみがえる。しかし、現実は何であっけないのだろう。姉と一緒にひろった骨はスカスカで軽かった。もし、あの時の祖父の死が肺ガンではなくて、脳死だったと仮定する。そして、臓器を提供し、今も祖父の臓器が誰かの体の中で生きているとしたら、それはとても素晴らしい事のように思えてきた。

最後に、もし私が何らかの事故で脳死と判定され、意識のもどる可能性はないと診断されたら、私はもうしてほしいだろうな。今はまだ私自身結論を出す事ができない。人の死、命の問題に自分自身で答えを出して良いのかと疑問がわき、また頭の中で堂々巡りがはじまるからだ。

「脳死は人の死だ」と受け入れる事ができた時、私は自分や家族の臓器を提供しても良いと思えるのかもしれない。この問題については、今後も家族と話し合って行きたいと思った。

◆優秀賞（中学生の部）

「日航機墜落の記事を読んで」

原町一中1年　森川（もりかわ）　沙紀（さき）さん

私は、八月十一日に掲載された見出しに、目が止まりました。そこには「父の「遺言」胸に刻んで」と書いてありました。記事を読んで見ると、今から二十五年前に多くの人が犠牲になった日航機墜落事故があったことを初めて知りました。詳しく知ろうと、私はすぐにお母さんやおばあちゃんに日航機墜落事故の事を聞いて見ました。

すると、二十五年前の八月十二日に群馬県上野村の御巣鷹の尾根にジャンボ機が墜落した事。そして単独機事故による死者数は世界でも航空史上最悪だったという事や、真夏の御巣鷹への救助活動がとても大変だった事、歌手の坂本九さんが亡くなった事、そして丁度私くらいの年の女の子が奇跡的に助かった事を知りました。私は、改めてとても悲惨な事故だったという事を感じました。

事故で亡くなった河口さんが、家族に残した遺言を私は、何度も読んでみました。手帳に書かれていた文も読みました。墜落直前の機内で、手帳七ページにわたりボールペンで刻まれた二一九文字。河口さんは、どんな思いで書かれたのか、そして河口さんだけではないと思うのです。家族に遺書を残した人が沢山いたに違いありません。機内は、きっとパニック状態だったことでしょう。その中で遺書を書いた乗客は、本当に無念だったことだと思います。河口さんの娘さんの真理子さんが、二十五年後の今、あらためて読み返し、「五十二での死はやっぱり早い。亡き父の年に近くなった自らを重ね合わせた」と記事にもあった様に、河口さんの中に、本当に今までは幸せな人生だったと感謝していると、次のページに写るほどの強い筆圧で書かれていた家族へのメッセージ。真理子さんが話している様に「遺書があったおかげで不慮の死が理解できたのかもしれない。父の年齢に近づいた今、わたしにあんなことが書けるかと思うと」と書かれていましたが、二十五年過ぎた今の真理子さんの本当の気持ちだと私は思います。真理子さんの母慶子さんには、河口さんの分まで、いつまでも元気で長生きしてほしいと思っています。

八月十二日、遺族が慰霊登山した様子を新聞やテレビのニュースで見ました。遺族の高齢化は進み、体力的に登山が無理になった人が多いとも新聞で見ました。二十五年という月日は、本当に考えさせられます。日航ジャンボ機墜落以降、日本の大手航空会社は来客が死亡する新たな事故を起こしてはいないそうです。また同じ事故が起こってはいけないと願っています。

しかしまた、ドナー希望者がもっと増えることを願う。僕は今後も臓器移植について知識を増やしたい。いろいろな立場の人の意見や体験談なども参考にして、無理せず、じっくり考えていきたい。

新聞記事から広がる視野

今回、福島民友新聞創刊115周年記念事業の一環として、「みんゆう新聞感想文コンクール」が開催されました。このコンクールは、新聞記事を読み、その感想文を書くことで、児童生徒に広い視野と豊かな心を養ってもらうことが狙いです。

寄せられた新聞記事の内容は、自然や環境の保護、虐待、高齢者問題、選挙、脳死、戦争など多分野、多岐にわたりました。子どもたちの目が、日々の身近な生活の出来事から、国内外の政治や社会の出来事まで幅広く向けられており、小学3年生から中学生の発達段階に応じて、興味・関心が学校から家庭、そして地域、社会へと広がっています。

◆審査委員長講評

福島地区中学校教育研究会
国語部長
佐藤　和彦（平野中校長）

まず、感想を読むと、出来事や事件を通して視野が広がり、新しい知識の世界につながっているのが分かります。さらに、学年が進むにつれて、一つの情報を自分の目と心でかみ砕いて、自分と社会の関わりまで考えを広げているのには感心させられました。

小学校で2011（平成23）年度、中学校で12年度から完全実施される新学習指導要領では、思考力、判断力、表現力などの育成のために「言語活動の充実」が求められています。

これを受けて、学校現場では、新聞を「生きた教材」として活用することの関心が高まっており、各教科で新聞活用の新たな可能性を探るさまざまな取り組みがなされています。読書離れ、活字離れが叫ばれる中にあって、新聞は、子どもの学習意欲を引き出し、読解力のほかにも、論理的思考力、問題発見力などの考える力を育むものとして、教育分野での幅広い活用が期待されています。

このような背景があってか、今回、第1回のコンクールとはいえ、小中学校合わせて113校から1797点もの多数の応募があり、あらためて学校現場での関心の高さがうかがえました。今後、このコンクールが回を重ねる中で、自ら考え、主体的に判断し、行動できる児童生徒の育成に寄与することを願っています。

◆優秀賞（中学生の部）

「いのちを贈ることを考える」

会津学鳳中1年　佐藤（さとう）　由輝（ゆうき）君

僕は五年生の冬に祖父と曾祖母を続けて亡くした。先日も親戚のおじいさんが亡くなり、お別れをしたばかりだ。人が亡くなる大きな悲しみを何度か経験している。この新聞記事の脳死状態の人は20代だ。若すぎるため、家族はどれほど辛かっただろう。生前に「臓器提供してもいい」と話していたことから、家族が本人の意思を尊重し、臓器提供となった。一回の脳死判定後、移植を待つ五人の人にそれぞれの臓器が移植された。生まれ変わった五人の人生は、素晴らしく充実したものになるのだろう。臓器移植の体験談に「娘の臓器が七人に提供され、七人の患者さんの中で輝き生きていくこれで良かった」というお話があった。娘の死を受け入れるだけでも大変だと思うのに、移植に興味のなかった親が、いきなり娘の意思を尊重できたことに驚いた。提供者側にすれば、大きな難しい問題だ。

健康な僕は、難病の兄と身体に障害があり、手術をくり返す一歳年下の従兄弟を見ている。「元気に登校できる幸せ」を普段意識することなく過ごす友人達より、貴重なことだと感じているかもしれない。

兄は四年前に病気になり、二年前から再発をくり返している。運動や計画していた各種検定・模試…全て奪われ、入院のたび絶望していた。兄は、個室とトイレしか行けなくなる。僕もいつも兄の邪魔はかりする病気が許せない。兄の入院中、祖父から母に、自分の腎臓を一つ兄にやりたいから、主治医に移植手術を頼んでほしい」と電話がきた。いつも再発の不安を抱える兄に一日も早く腎臓をやりたかったらしい。そこまで考えてくれていた祖父に感謝した。父が今の兄の状態は、腎移植の対象ではないことを伝えた。もし腎移植で兄の病気が完治するのなら、僕もたった一人の優しい兄のため、腎臓を提供できる。しかし「脳死後に他人に臓器提供できるか」と言われると、中一の僕は答えを出せない。その一方で、自分が移植しか治療法のない病気になったら、移植を望むだろう。

日本では提供者が少なく、移植希望の登録をしても、待機中に亡くなる方が多い。大変気の毒だ。ほとんどの人は心臓死で亡くなる。「脳死」は、事故などで脳を損傷した人に人工呼吸器をつけて呼吸を助けることで、心臓が動いている状態のことだ。医療技術の発達で脳死が発生したことを知った。改正臓器移植法により、8月22日までの三例の臓器移植で十五人もの人が移植を受けることができた。関係者の笑顔が目に浮かぶようだ。移植に興味を持つ人が少しでも増え、ドナー希望者がもっと増えることを願う。僕は今後も臓器移植について知識を増やしたい。いろいろな立場の人の意見や体験談なども参考にして、無理せず、じっくり考えていきたい。

第1回　みんゆう新聞感想文コンクール　最優秀・優秀作品